

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	○ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の涵養
目標（評価規準）		①【学習態度】授業規律を守り、粘り強く学習に取り組んでいる。 ②【対話的な学習】自分の考えをもち、他者との対話を通して考えを深めている。 ③【見通しと振り返り】「見通し」をもって授業に臨み、単元終了後などで「振り返り」を行っている。 ④【自学自習】家庭での学習に自ら取り組んでいる。
重点に係る現状 設定理由		学習指導要領の「確かな学力の育成」を踏まえ、学習に対する目標を明確化・具体化し、その意義を踏まえながら向上心をもって粘り強く取り組む生徒の育成を家庭との連携のもとでめざしたい。

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	①学習態度について、肯定的な回答は100%だった。なお、自由記述から、「教科打合せを有効に活用している」などの取組が挙げられた。 ②対話的な学習について、肯定的な回答は80%だった。昨年度は96%であり16ポイント下がった。 ③見通しと振り返りについて、肯定的な回答は84%だった。これは、3年連続で増加している。 ④自学自習について、肯定的な回答は68%だった。前年度は85%であり、17ポイント下がった。
各アンケート等の結果	①学習態度について、3年生の生徒・保護者の肯定的な回答はともに90%を上回った。また、2年生は生徒と保護者との値がそれぞれ73.7%と74.0%と近接した。 ②対話的な学習について、生徒の肯定的な回答は全学年で70%を上回った。同様に保護者は全学年で80%を上回った。特に3年生の保護者は97%が肯定的な回答を示した。 ③見通しと振り返りについて、すべての学年の肯定的な回答で生徒の方が保護者よりも高い値を示した。また、1・2年生の保護者について、肯定的な回答よりも否定的な回答の方が上回った。 ④自学自習について、すべての学年の肯定的な回答で保護者の方が生徒よりも高い値を示した。また、1・2年生の生徒について、半数以上が否定的な回答をした。
自己評価結果 （見解と改善方策）	①学習態度について、教科打合わせを有効活用するなどして、全員が指導の工夫や改善に取り組んでいる。また、2年生については、生徒が評価を意識するようになり、自分ができない点を見つめられるようになってきた。それに伴い保護者も評価について意識するようになってきたと思われる。 ②対話的な学習について、例えば次のような実践について効果があったと思われる。 ・毎回の授業で4人の小グループで取り組む（発問→考える場面→発表する の流れを意識する） ・生徒に説明させる ・ワークシート等の見せ合いをさせる ③見通しと振り返りについて、生徒は各教科で「振り返り」をしているが、そのような実践が保護者には伝わっていないと思われる。 ④自学自習について、勉強の仕方が上手く伝えられていないので家庭学習を定着させにくいと想像される。教科の学び以外でも、興味・関心をもったことを調べる、作業をする、などの取組についても、学び方を含めて指導していく。
学校関係者評価結果	学校関係者評価委員には、協議の前にまず実際に授業を見学していただいた。 その感想から、「生徒は真剣に学習に取り組んでいる」「自分で学びを進める時間を有効に使い、学習に対して前向きに取り組んでいる」「タブレット端末や教科書など、自分の課題に応じて学習方法を選択している」といった前向きな意見をいただいた。 しかし、同時に「本時の活動内容やめあてをしっかりと示すべきである」といった改善点についてもご指摘を受けた。
最終改善方策	①学習態度についてはどの学年も授業規律がしっかりとできていると思われる。チャイム前に着席し、号令で始まり号令で終わるなど、基本的な授業規律を守ることを次年度も継続して取り組んでいく。また、学年会や日常の会話で、生徒指導面だけでなく、授業での取組についてのプラスの評価も話題にしていく。その他、生徒が頑張れたと思える指導の工夫や場面の設定を通して、主体的に学習に取り組む態度の育成につなげていくとともに、粘り強く取り組む姿勢の指導について今後も研究を続けていく。 ②対話的な学習について、教科を超えて共通して話し合い活動やグループワークをしているので、教科が変わってもスムーズに活動できている。今後は、単元や学習の内容、発問のタイミングなどについて、教員同士の対話を通して思考を深めるなど、学校全体で授業改善に取り組んでいきたい。 ③見通しと振り返りについて、特に「振り返り」に重点が置かれていると感じられる。今後は、「見通し」（ガイダンス等で学習の目的を生徒に伝えるなど）についてもより一層取り組んでいき、生徒が先を見て学習できるようにしていく。そのためには、単元計画や評価計画等を大切にしていく。 ④自学自習について、生徒が興味・関心をもった内容についても家庭学習で自主的に調べられるよう指導を工夫していく。

本年度の重点	2	○ 自己肯定感をもち、互いに協働しながら、持続可能な社会の創り手となるようとする生徒の育成
目標（評価規準）		①【自己肯定感】自分のよいところに気づき、自己の特性を活かしながら諸活動に取り組んでいる。 ②【人権感覚の醸成】人権感覚を身に付け、他人や社会との関わりの中で実践している。 ③【集団生活の向上】集団の一員として協力的な言動をとっている。 ④【他者への貢献】よりよい学校生活・持続可能な社会を築くために、自分で考え、行動している。
重点に係る現状 設定理由		本校における人権教育の取組を継続しながら自己肯定感を育むとともに、多様な他者と協働する様々な集団活動（授業や行事等）を通して、よりよい学校生活や持続可能な社会を築こうとする資質・能力を育成したい。

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	①自己肯定感について、自由記述から、生徒の自己肯定感を高めるための声かけやフィードバック、褒めることなどを普段から実践している。 ②人権感覚について、肯定的な回答について昨年度と比較すると、96%から88%と8ポイント下がった。しかし、全体的に高い値を示した。 ③集団生活について、肯定的な回答は昨年度に続き100%の値を示した。 ④他者への貢献について、肯定的な回答は92%と高い値を示しており、生徒や保護者と比較しても最も高い値を示している。特に2年生の生徒と比較すると47ポイントの差がある。
各アンケート等の結果	①自己肯定感について、生徒への「自分のよいところはどこだと思っていますか。」という問いには、全学年で「明るい」という回答が多く見られた。同様に、保護者への「お子さんのよいところはどこだと思っていますか。」という問いには、「優しい」という回答が多く見られた。 ②人権感覚について、教職員の肯定的な回答が、すべての学年の生徒や保護者よりも高い値を示した。また、すべての学年の保護者の肯定的な回答は80%を上回り、生徒より高い値を示した。 ③集団生活について、すべての学年の肯定的な回答で生徒は90%を超えており、保護者もほぼ90%を超えている。また、生徒で「そう思わない」と回答をしたのは、各学年1名以下だった。 ④他者への貢献について、すべての学年で、保護者の方が生徒より高い値を示した。その差は、1年生15ポイント、2年生23ポイント、3年生21ポイントであった。また、肯定的な回答については、昨年度と比較すると、すべての生徒・保護者で下がった。
自己評価結果 （見解と改善方策）	①自己肯定感について、2年生の記述から「わからない」が目立つ。自己分析や自分の特徴を見いだす場面が少ないと予想される。 ②人権感覚について、自分の良さや他者との違いを認識したり、その違いを認め合ったりすることを目的として、L G B T Qや外国の方の講演を企画し実施したのが効果的だったと思われる。 ③集団生活について、授業でのグループワークなど、他者に関わるような学習にも違和感なく取り組んでいる。学校行事や学年レクリエーションなどの場面でも、「活動しない」「嫌な雰囲気を出す」ような生徒もほとんどおらず、周りや協力しながら物事を進めている様子がうかがえる。 ④他者への貢献について、自分に与えられた役割（「掃除に丁寧に取り組む」等）をきちんと果たすなど、他者のためになることができています。他者への貢献は、地域だけでなく身近な生活での行動も含まれることを認識させたい。また、学校等をよくするために教員の指示を聞いて動くことはできるが、自分で何をすべきかや、何が必要かを考えて自ら行動するのが難しい生徒がいる。
学校関係者評価結果	学校関係者評価委員からは、子供会の行事や「菊名の飴屋踊り」などで、中学生が積極的に参加してくれたことが地域の活性化につながり、その姿が大人たちを元気づけてくれているという意見があった。また、小中合同での避難訓練では、中学生が小学校低学年の児童を優しく誘導している姿が素晴らしいとのことご意見をいただいた。
最終改善方策	①自己肯定感を育成するため、今後も行事や学年集会などで、自分の能力が発揮できる場面づくりや、良いところを伝え合う・認め合うなどの活動に継続して取り組んでいく。また、学習が苦手だったり困難を抱えていたりする生徒にも、活躍できる場や居場所を実感できるような手立てを考えていく。 ②人権感覚について、生徒にとっては自分の良さや自分の能力を発揮する場面がうまくイメージできていないように思われる。自己肯定感の育成と関連づけながら、教員や生徒間で、個々の良いところを日常から認め合い、その力が発揮できるよう、授業や行事、日常生活の中で自分のプラス面を表現できる場を増やしていきたい。 ③集団生活について、今の状況を維持していけるよう、様々な場面で声掛けや指導に取り組んでいく。ただし「そう思わない」と回答をした生徒については今後も注意深く観察し、原因を追及し解決をめざしていく。 ④他者への貢献について、学校等をよくするために、自分たちで考える場面や自分たちで課題に取り組むような活動を意識的に増やしていく。また、失敗経験を通して、何が駄目だったか、どこに問題があったかなどを考えさせる活動を意図的に取り入れていく。

本年度の重点	3	○ 基本的な生活習慣を定着させ、よりよい人間関係を形成しながら、自己実現を図ろうとする生徒の育成
目標（評価規準）	①【規律・礼節】秩序や規律のある生活を送るために、きまりの意義を理解し、礼節をふまえ、時と場に応じた言動をとっている。 ②【安心・安全な生活】暴力や暴言、いじめのない、安心して安全な生活を送っている。 ③【望ましい人間関係の構築】互いの人格と個性を尊重し、よりよい人間関係を築いている。 ④【生き方としての進路】自分のよさを発揮するための主体的な進路選択を通して、自己実現を図ろうとしている。	
重点に係る現状 設定理由	睡眠時間をしっかりと確保することや朝ご飯を食べること、SNSの正しい利用などの基本的な生活習慣を基盤としながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在および将来における自己実現を図っていくことができるようにしたい。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	①規律・礼儀・あいさつについて、肯定的な回答は昨年度に引き続き100%の値を示した。 ②安心・安全な生活について、肯定的な回答は96%と、生徒、保護者と比較しても最も高い値を示した。 ③望ましい人間関係に関わる肯定的な回答について、「生徒と大人との関係」構築の指導については100%だった反面、「生徒同士の関係」構築の指導については76%だった。 ④生き方としての進路について、肯定的な回答は100%の値を示した。
各アンケート等の結果	①規律・礼儀・あいさつについて、すべての学年で肯定的な回答は、生徒、保護者ともにほぼ90%を超えており、昨年度と比較すると、2年生の保護者以外はすべて上昇した。特に、3年生については生徒、保護者ともに最も高い値を示している。また、「そう思わない」と回答した人数について、生徒、保護者ともに各学年2名以下であった。 ②安心・安全な生活について、すべての学年で肯定的な回答は、保護者の方が生徒より高い。特に2年生でその差が26ポイントと顕著であった。また、3年生の肯定的な回答は、生徒、保護者ともに90%を超えていた。 ③望ましい人間関係に関わる肯定的な回答について、「生徒と大人との関係」では、保護者は90%を超えていた。また、全学年で保護者の方が生徒よりも高い値を示していた。逆に「生徒同士の関係」では、生徒は90%を超えていた。また、全学年で生徒の方が保護者よりも高い値を示していた（「生徒と大人との関係」とは逆の結果となった）。 ④生き方としての進路について、すべての学年で肯定的な回答は、保護者の方が生徒より高い。特に3年生の保護者は94%だった。
自己評価結果 （見解と改善方策）	①規律・礼儀・あいさつについて、時と場合に応じた言葉遣いや行動について、反射的に不適切な言葉を使ったり、乱暴な言葉を軽々しく使ったりするなど、まだ取組が不十分な生徒がいるので、今後も指導を続けていく。なお、否定的な回答をした生徒は、自分自身の言葉や行動を反省できているとも捉えられる。 ②安心・安全な生活における、学年があがるにつれて、保護者が学校の指導に納得している状況が読みとれる。また、否定的な評価をした生徒は、いじめやからかいに対する問題意識が高まっているとも捉えられる。小さなことも見過ごさず、しっかりと対応していく姿勢は今後も大切だと考えられる。 ③望ましい人間関係について、生徒の自立心が芽生え、自分たちで解決しようとしている姿が見られた。反面、様々な状況にある生徒との関係づくりのために、研修などで学んだり、学校内外で連携をとったりしながら、粘り強く取り組む必要がある。また、本校の生徒について、良い友人関係を築けていることがわかった。例えば、全校レクリエーション等を通して、学年を追うごとに友人とのコミュニケーション能力の向上が見られた。 ④生き方としての進路について、1年生のうちから高校調べなどに力を入れたり、2年生について職場体験を実施したりしたが、生徒や保護者にとって進路学習や職業学習について考え取り組むきっかけになったと思われる。特に、今年度から復活させた職場体験は有効であったと思われる。
学校関係者評価結果	学校関係者評価委員からは、特に、「安心・安全な生活」や「望ましい人間関係（相談しようと思える人がいるか）」について、単純に数字の多さや少なさで判断するのではなく、その背景にある生徒一人ひとりの状況をじっくりと考え、見ていく必要があるとの指摘をいただいた。
最終改善方策	①規律・礼儀・あいさつについて、教員が生徒に教えていくのはもちろんのこと、教員が生徒の見本となる言動をするよう、これからも意識して取り組んでいく。 ②安心・安全な生活について、生徒一人ひとりをしっかりと見ながら取り組んでいく。特に、いじめやからかいの未然防止のために教員が先を読んで考えられる力をつけるよう、例えば以下のような取組を継続して実施していく。 ・生徒指導に関わる自主的な研究会の開催。 ・生徒指導に臨むとき、その場の対応だけでなく、その後のことも意識して指導する。 ・先輩・後輩や学年を超えた連携などを意識して取り組む。 また、暴力暴言、いじめやからかいなどについて、集会などを通して全体に呼びかけていく。 ③望ましい人間関係について、今後も指導スキルの向上を目指して研鑽を続けていくとともに、積極的・継続的に気になる生徒に声掛けをし、話しやすい関係づくりをしていく。 生徒同士で助け合ったり相談しあったりするためには、教員の介入のタイミングについても考えるべきである。教員の、生徒との距離感（遠すぎず、近すぎず）を見極める力の育成が必要になってくるので、生徒との関係性をどうつくっていくのか考え取り組んでいく。 ④生き方としての進路について、進路や職業等の生き方について学ぶ機会を設定するために、1年生のうちから、自身の将来の展望を意識できるような授業等を展開し、2年生では職場体験を今後も実施していく。